

「であい・ふれあい・まなびあい」から
「つながりあい・ささえあい」へ

おおつ! おおおか! 再発見 大岡集楽学校



大岡一〇区をフィールドに開催する地元学講座
「であい・ふれあい・まなびあい」から「つながりあい・ささえあい」へを
テーマに、昨年と今年の二年間、大岡全区を北から順に巡っ
ています。今年度は、中央中部根越芦ノ尻笹久の五地区
を探访、地域を歩きながら、地域のみなさんと交流し、地
域を再発見する意義深い講座です。各区を巡りながら、地
元の方の説明や講師・宮下健司先生の解説を交えて地域のこ
とを学びます。

大岡地区住民自治協議会 会長中村哲夫

其之 10
笹久
ささきゆう
平成28年
11/6(日)

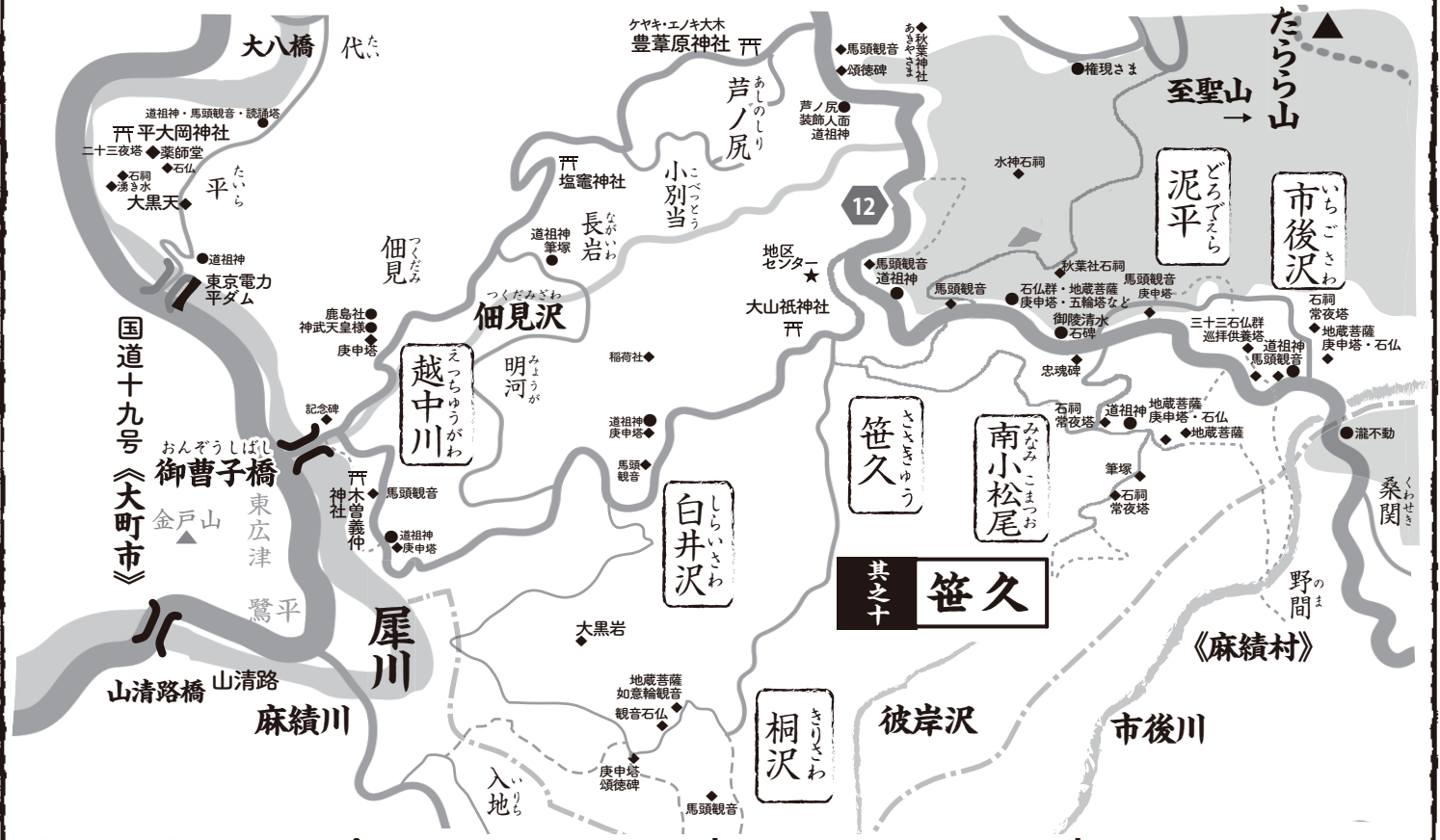
大岡支所 開講式

- ⇒ 市後沢 番所跡地、馬頭観音
- ⇒ 御陵清水 石碑・石仏群
- ⇒ 笹久道祖神 双体道祖神
- ⇒ 大山祇神社 玉垣・天井絵
おやまつみ 本殿内の縁起装飾
- ⇒ 大岡支所 2F大会議室

ビデオ紹介 講師のお話
白井沢・泥平
桐沢・南小松尾
大黒岩など

午後
⇒ 大岡民俗資料館見学会
縄文時代から近代の養蚕資料
道祖神や民俗資料が盛沢山
(解散) 16:00頃

主催 / 大岡地区住民自治協議会・笹久区 共催 / 長野市大岡支所・大岡中学校・大岡小学校・大岡小中PTA



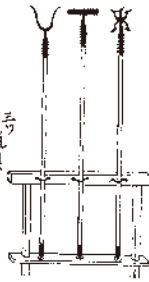
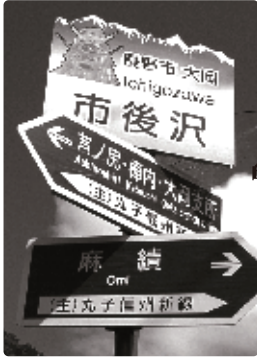
1 市後沢 集落

清らかな沢にこめられた
豊穡の願い

◎現在の戸数四軒。麻績村と大岡の境の地で、江戸時代には市後沢をはさんで麻績側の桑関と大岡側の市後沢に口留番所がありました。松代藩領大岡村の番所は聖口と二カ所、古文書によると番所七間三間の二坪の広さで修復もたびたび行われていたようです。番所役人の手当は元禄七年（二六九四）に「高三拾三石二斗九升七合」で、代々宮島家が勤め、毎日の出入りを管理し記帳していました。

◎麻績は御厨が置かれ東山道支道が通り、都の文化の流入地でした。平安時代中期の『和名類聚抄』では麻績（麻績）が更級郡に含まれていた記述もあり、聖山山麓一体としては大岡側とをつなぐ地です。

◎江戸時代中期頃までの古文書では市後沢を「いちざ沢」「覆盆沢」と書いていました。「覆盆子」は「木イチゴ」の表記ですが、カメ（甕川盆）を覆し陽気を強くする意味があてがわれており、聖山の南北境界にある沢に吉祥を願って名が付けられたのかもしれない。



アルプスの手前は生坂の山々が屏風のように、大城には戦国時代丸山山城跡がある。



大岡南西がわの山々
アルプス絶景地!

身体をつかつかって歩いて、馬で走って情報を伝えていた時代。日常のむこう側から、境界からやってくる新たな情報が、暮らしを、活性化させ、日常を変えていく。



麻績方面への交通の要衝
引用資料『大岡村誌』より

「市後沢」を渡る。県道沿いに



境に植えられた杉は二本一体となる吉祥の夫婦杉。



麻績村への境界を超えると桑関の穴水観音。近くの家が水を利用して豆腐屋を営んでいたことがあるという。



市後沢周辺の石仏・石塔群

◎山に還る石仏さまたち

中世より村落の境界となった市後沢周辺には交通要衝地のため今は山地に還りつつある旧道沿いの山中に「馬頭観音」の石仏がたいへん多くみられます。また、現在では信仰が途絶えた修験者の足跡も石祠などとして残ります。

市後沢の道祖神は双体道祖神。馬頭観音は文字を彫ったものが多い。



西国三十三番供養塔

大岡では内花見の観音山にも札所を写した観音石仏群がみられますが、市後沢の旧道沿いにもあり、「文政八西七月十七日當村願主渡辺新佐エ門」とあることから市後沢在住の渡辺氏が願主を募って1825年頃に建立したことがわかります。

どろ だらら 泥平集落

◎現在の戸数一軒。他の笹久内集落名同様に寛文四年（一六六四）の文書にも記載の見える村名で天明七年の五人組構成人数は二十一人（市後沢を含む可能性）。江戸末期には市後沢と（覆盆沢）は南小松尾村に含まれています。

みなみこまつお

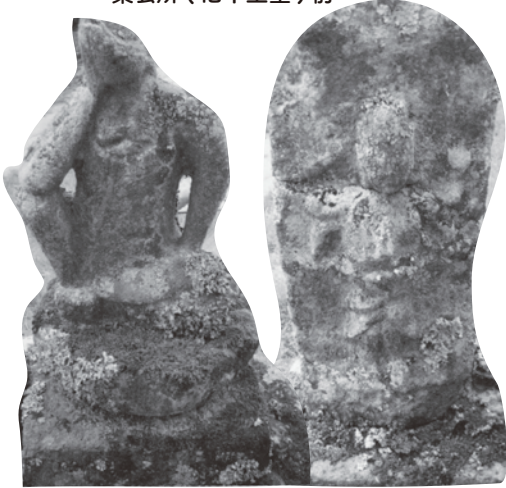
南小松尾集落

◎旧七軒あった現在の戸数一軒（五年前から）江戸時代後期天明七年五人組構成の村人数は十二人でした。氏神は、川口の建大岡神社の分社（諏訪社）。集落内の筆塚は「村田春齋筆子中 明治三十二年二月 山本松東書」と刻まれています。筆子（門下生）は大岡の他、麻績、本郷からも学びに来ていたといえます。建立した弟子の山本松東は伊那の人と伝わっています。

『大岡の石仏』より



集会所（旧十王堂）前



●如意輪観音

●庚申塔 青面金剛像
下段に三猿を刻む



畑の中の
地蔵さま観音さま



◎道祖神

道祖神の古いかたち!

小さい無銘の石で、正月7日に、その上を正月に飾った注連縄（主にヤス）で覆い、小屋を作る。古くなった注連縄はドンとやきで燃やす。以前は、燃え終えてきたころを見計らって、前の年に生まれた子どもの家の方向に火を倒して子どもの健康を祈った。



巨大な石積!

山見番所跡

南小松尾の村田敬子さん敷地内にかつて松代藩御林の山見番所（五人扶持）があった。大石を積んだ石垣がその面影を伝える。

仕事はじめに
弓矢を月の数捧げる
山の神様!



◎山の神

山の神

山からの収入を得るための重要な神様で、村田さんの家から整備された山道をたどり、5分程のところにあり。1月17日、各家で弓に12本（閏年は13本）の矢を捧げる。そのあとは子どもたちが遊び道具として使った。

集落の南の沢筋に南小松尾の田んぼ（8反歩）があり、その南側に炭鉱があった。まだ穴（坑道跡）が残っている。かつて笹久の人など6~7人は働いていた。

◎筆塚



建立銘に「村田春齋筆子中明治三十二年二月山本松東書」と刻む。村田忠左衛門（青齋）は江戸末期の武士で天保・慶応にかけて書・漢・俳を教えた。江戸で生まれ大槻盤溪に師事した。師の盤溪は漢学者で文章家としても名高く戦国大名の活躍を記した『近古史談』は、旧制中学校の漢文の教科書としても使われていた。（下記参照）



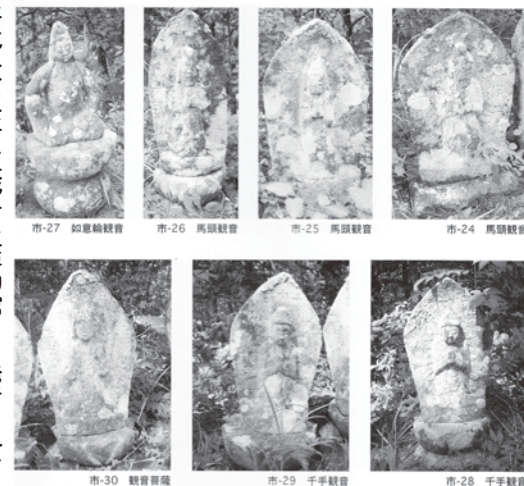
JR一ノ関駅前の大槻三賢人像

正面向かって左側の大槻盤溪。父の大槻玄沢は「解体新書」の改訳、「重訂解体新書」の完成など医学の進歩に貢献し日本のブラックジャックと言われている。三男文彦はわが国最初の辞書「言海」を完成させた。

大槻盤溪は幕末・明治の儒学者・砲術家・蘭学医師大槻玄沢の二男として生まれ、早くから開国を唱えて活躍。仙台藩の藩校学頭として戊辰戦争時には、藩政を左右するほどの思想的影響力を持ったがその後は責任を問われ投獄された。開国論に与えた影響は大いなものがある。著書は「孟子解約」「近古史談」など多数。一八五一年には江川英龍の門下で砲術を学んだ同門佐久間象山が西洋式カノン砲の試し撃ちを行ったが、盤溪はこの手助けを行っている。

象山と通じていた
大槻盤溪の弟子が先生だった!
幕末の世界と大岡

平成二十三年に長野市立博物館より発行された『大岡の石仏』より。本は博物館で購入可能。



2 笹久

「御陵」伝承のある村

◎以前は二六軒だったが現在は二〇軒。笹久地区は石津組に寛文四年（二六六四）の文書にも記載の見える村名で天明七年の五人組構成人数は四十三人、大きくは大岡石津組（大岡根越組）に含まれています。幕末の調査では村人数二〇八人の大村でした。

◎笹久地区は山尾根に囲まれ集落は平地ですが水に恵まれず北側の山のため池がつくられ、秋葉社、水神が祀られています。集落内に石祠の鹿島社を祀り地元では風の神様とされています。

◎「大山祇神社」の社領として区が九〇町歩の区有林を所有し、現在も固定資産税を共同で支払っています。



お堂跡
 県道沿いに卵塔、庚申塔、五輪塔、念佛千返塔、念仏塔、地蔵菩薩などがある。

◎双体地藏尊



◎道祖神

ユーマアあふれる

「五百両」の威嚇

◎笹久バス停横にある道祖神の裏側には「五百両」左側荷は「笹久代五百両」の文字が刻まれています。「道祖神の縁想」「嫁入り」などとも称される道祖神盗みの風習は繁栄している村から盗っていくことで繁栄にあやかる等の目的がありました。盗難防止のため、道祖神裏側に、代価（結納金）として高額な金額を書いておくことも多く、正月の決められた夜には他の村から来た人が盗んでも罪にならないという習慣があったと伝えられています。



「笹久代五百両」の文字を刻む仲むつまじい道祖神。

◎筆塚

莫惜旧陵荒棘榛遺名存

水涌無限三冬気煙猶生
 草九夏風涼鮮健人端价
 遥斟誤其實病翁為喫恨
 非真須知是亦王孫徳満
 孔甘泉日夕新

松澤尚房題并書

（おまかな意味）
 遺名が存する古い丘陵が荒れて棘の藪に覆われるのが惜しい、無限の三冬（初冬・仲冬・晩冬）あつてこそとりもなおさず気煙の勢を保ち水が湧く草は九夏の暑い盛りを経て鮮かな涼風が吹く、こく健やかに坐する事情を酌み恨喫て弱った老人の為にその実を注いで王の孫の徳を満たして待つ美味しい甘い水は日々新しい



「御陵泉」石碑（筆塚・頌徳碑）

建立銘に明治廿一年四月廿二日刻の文字を刻む（二八八八）松澤尚房の頌徳碑として筆塚中が建立、表面に師の「御陵泉」の師の詩と書を刻影。尚房は松沢儀右衛門で幕末、明治に学校教育に貢献した、麻績の生まれ。建立は政順（笹久分校、根越、大岡の学校教員。また、笹久には小林富道（弥五兵衛）が書、漢算を教えていた。村役員で政順校の執事も勤めた。

- ◆「会見汝在棘榛中耳」芥川竜之介…あなたは棘榛の中に埋もれるだろう
- ◆「三冬」潜竜はに蛰して一陽来復の天を待つ…太平記四
- ◆「九夏」九旬・夏の九十日間
- ◆「端价」…坐る 静坐
- ◆「斟」…酌的…事情をくみとして

3 御陵清水

『長野県町村誌』に「古老が申すことには、大昔より御陵臺、聖臺と称している所がある。径六尺高さ二〜四尺の石または砂をもつて築いた塚である。塚の場所は字池田に属

4 大山祇神社

おお やま ずみ じん じゃ

通人の風雅な好みが
込められた社殿……



○「大山祇神社は神社入口の石の鳥居に石の扁額が懸かっているが地元では「お宮」と呼ばれていた。この地の産土社で昭和十六年に集落センターの北にある山上から現在地に移転された。

ました。祭日は四月の第一日曜日と九月二十二日です。

○社殿の中に「奉仕鎮座祭大山祇社 紀元二千六百年 昭和十六年十月十六日、社掌 宮林」と書かれた棟札が残ります。また「方位取調（大正元年）」と書いた木札や「稲荷大神」の扁額もあり、笹久組の神々をここに集め祀ったことがわかります。

○拝殿には、諏訪大社の神紋「梶の葉紋（梶あり梶）」が染め抜かれた神前幕が掛けられ、境内には「諏訪神社」の社号石碑も残ります。○明治十四年三月発行の村誌には「諏訪社」とあり、祭神は建御名方命、八坂刀賣命、大己貴命が祀られ、老樹があったと記されています。

「奉 上棟 諏訪神社 皇祖長久守護 手置帆負命（たおきほおののみこと）、彦狭命（ひこさしりのみこと） 昭和十五年五月二十八日」とあるので、上棟式の時点では諏訪神社として建てられていたのかもしれませんが。

○手置帆負命と彦狭知命は共に工匠（工作を職とする人）の守護神とされ、木造建築の上棟式（棟上げ）などの祭神。その際前述の「奉 上棟……」ようにご神名を棟札に

工事の概要と共に墨書きしてお祀りし、祝詞でも奏上されます。上棟祭では、他に、家屋を守護する屋船久久運命と屋船豊于気

姫命、地域の神様である産土神を祀ります。○覆屋（おおいや） 本殿を保護するために設けられている建物）の天井に、土、矢、小槌、草鞋などが置かれています。その前の梁には「安政六年 八月大吉日 當村中」と書かれた神札箱が取り付けられています。

○本殿内には、石神二柱、自然石二体、反りのある日本刀が祀られています。



覆屋天井には木槌なども。



風雅な拝殿の天井絵。

し塚を踏んではいけないし、夜中に墓参すれば病気が治るといふ。塚上には杉の太木が茂っている。」とあり、また『大岡村誌』では「その伝承を辿って探したがわからなかった」と記されています。

この「御陵」の伝承を詩的に現し碑文に納めたのが「御陵泉」の碑で、建立時には「御陵」の場所は既に荒れてしまっていたのかもしれない。漢詩碑文の下地にみえるのは幕末から明治にかけて盛んだった「陽明学」で、そこには鎌倉幕府滅亡から建武の新政にかけて信仰された密教と朱子学による尊王の思想が下地にあります。建武の新政権を建てた後醍醐天皇。その皇子「宗良親王」が「更級」を詠んだ句もあることから、聖山周辺では麻績や大岡に滞在したとして江戸時代初期から伝承されていた可能性もあり、幕末から明治に全国で大流行した「宗良親王」の句のイメージを郷土の誇りに、人々が王の招魂再生を陵墓にかさねて語っていたのかもしれない。

また、御陵は「みささぎ」ともい、陵の「ささぎ」が笹久の地名になった可能性もありますが、詳しいことはわかっていません。

後醍醐天皇の皇子「宗良親王」は伊那の香坂氏が庇護し潜伏の時を過ごした。中世に大岡周辺を治めていた香坂氏との関係が考えられるが、詳しくはわかっていない。

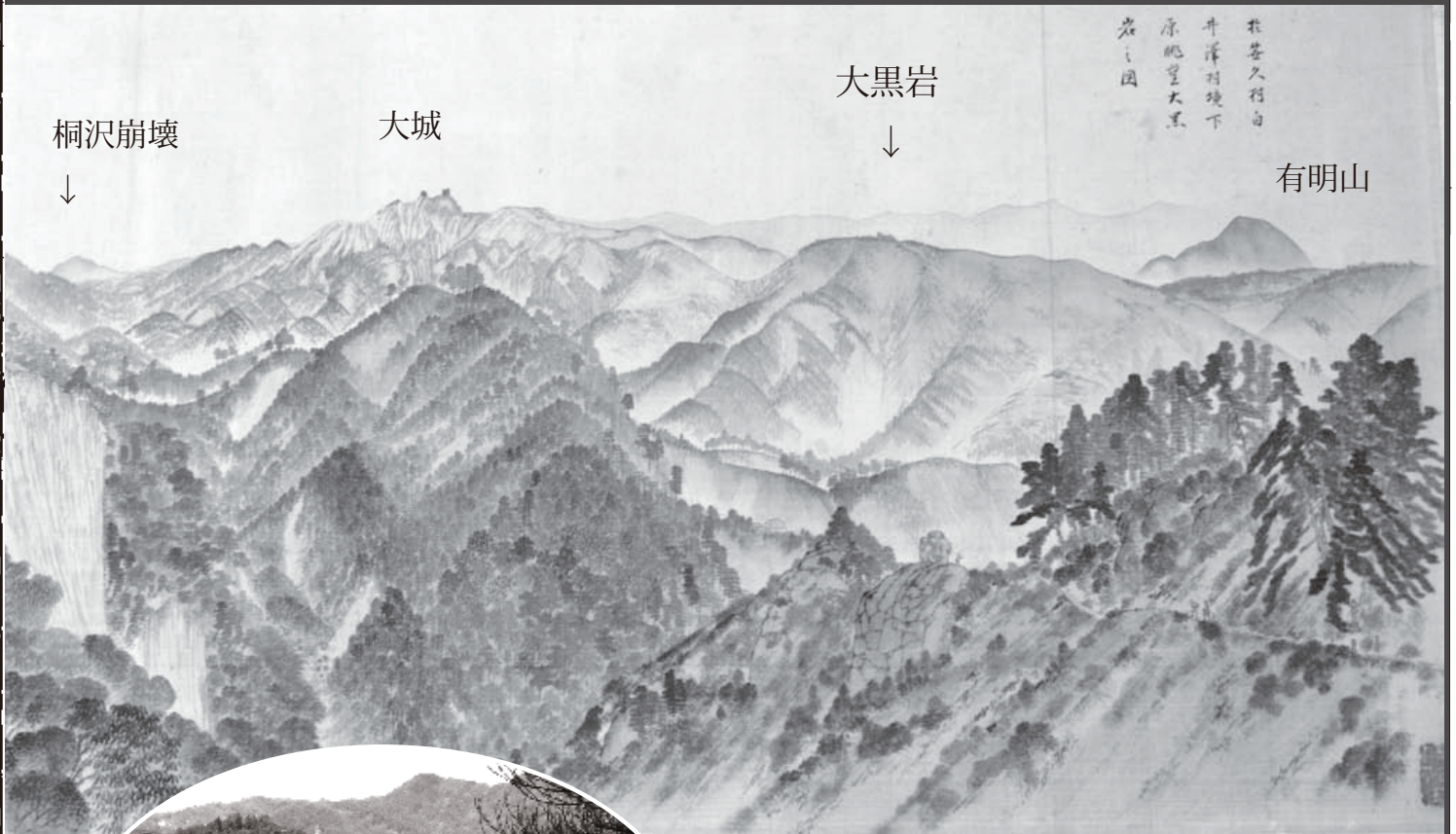
御陵清水



更科の月みてだにも我はただ
都の秋の空を恋しき



大岡の神社では珍しい石の玉垣。寄進者に当時の信仰の形跡。



桐沢から笹久への山道両岸にキタゴヨウマツの幼木がたくさん生えている。このあたりからが大黒岩がよく見えるビューポイント。

於笹久村白井澤望 大黒岩背景之図



巡視行程

絵 図

地震後2年目の嘉永2年(1849年)3回に分けて行われた藩内の巡視絵図の完成は、それから1~2年後。
 大岡地区を含む第3回目の巡視の時の図をまず入れ、続いて、第2回目、第1回目と並べられ、巡視の順番とはちがっている。

第三回目の巡行 千曲市大田原~長野市大岡~信州新町牧野島方面 二泊三日

一日目 嘉永2年(1849年) 閏4月14日 一日目の行程

長野市松代馬喰町(松代城)ー清野ー二軒茶屋(赤坂の舟渡)ー小森ー御幣(おんべ)川
 ー塩崎ー船荷山ー桑原村本陣 柳沢量平(松代より三里余)
 ー田原坂峯(桑原から二十三丁)ー大田原村ー小田原ー大花見(おおげみ)池
 (田原坂峯から一里二丁五十四間)ー中牧村(大花見池より二十六丁十二間)
 ー南牧村ー米田和ー外花見ー内花見村高巖寺
 (南牧村より一里九丁五十四間 本日の行程 約28.6 km)

二日目 嘉永2年4月15日 二日目の行程

内花見村高巖寺ー宮平ー樺内村ー天宗寺門前ー芦ノ尻金毘羅社(内花見より三十五丁三十六間)
 ー笹久村ー白井沢村下原(芦ノ尻より三十三丁十八間)
 ー笹久(大黒岩を遠望する)ー芦ノ尻金毘羅社ー門増村(下原より老里六丁二十四間)
 ー石津村ー町田村ー和平ー大田和村(門増より三十丁二十二間)
 ー川口村安賀(やすか)(大田和より二十八丁)
 ー日合(にちあわせ)組ー北小松尾ー又風
 ー内花見村高巖寺(川口村より老里十八丁十四間) 本日の行程 約21.5 km

真田幸貫

○中の日十五日、六里七丁五十四間
 一、お泊より宮平組、樺内村、芦野尻分地金毘羅社地までお通筋。
 但宮平村庚申塚まで格別登りござなく、樋口沢まで次第に下り、樺内村まで登り、天宗寺門前まで登り下り少く、金毘羅社内へ九十間程新道登り坂にござ候。
 御右の方萩窪村雨池村、大田和村和平組、萱刈場村仏風村
 左の方宮平組御高札、今泉天宗寺。
 ○御野立所 芦野尻村金毘羅社地
 内花見御泊より三十五丁三十六間
 一、御野立所より芦野尻村、笹久村白井沢村境字原御野立所までお通筋。
 但芦野尻村出外より市沢辺まで次第下り、笹久村まで格別登りござなく、お野立所まで下り坂にござ候。
 ○御野立所 笹久村 白井沢村 両村境字下原
 金毘羅より三十三丁十八間
 大黒岩御遠見なされ候。
 一、右御野立所より芦野尻村字芦野田辺までお引返し、門増村御小休所までお通筋。

笹久地区センター所在地

◎大岡小学校笹久分校跡

明治五年に「学制」が敷かれ、国民皆学と近代教育体制が進められるなか、笹久学校（のち政順学校に改名）の開校は、村内で一番早い、明治七年三月十五日。八年に根越学校を編入しました。その後、一村一校組織になり、笹久組の共有地は笹久派出所となります。「小学校令」が公布された十九年以後、小学校は尋常・高等の二段階に分けられ尋常科は義務教育に。明治四十三年十一月二十三日、新築の笹久分校が開校。戦後は榑内本校と和平・北小松尾・笹久・根越の四分校で新学制を発足。分校の統廃合を進める国の政策もあつて、昭和四十七年に笹久分校は、大岡小学校に統合され、その歴史を閉じました。



笹久分教場開校式（明治43年11月）

校舎の後ろの小高い丘に神社がある。現在、校庭入口に石の校門が残っている。校庭の隅に、大きなしだれ桜の木がある。

大岡歴史民俗資料館

懐かしい写真や民具、信仰の足跡などが盛りだくさん。



民俗資料館のあゆみ

昭和三十年～四十年代の高度経済成長期を境に、生活様式が変わり、古くからの農具や生活用品がどんどん消えていきました。そんな中で、ふるさとを見直そうとする機運が持ちあがり、県内各地でも「歴史民俗資料館」が新築開館されていきました。大岡村でも昭和五十一年（一九七六）創立二十五周年をむかえた大岡中学校が記念事業として、PTAを中心に散逸がはげしい民俗資料の保護と管理の重要性を訴え、その収集を呼びかけました。「子どもたちに、古い農具を教えよう」と、村内の家々から、おもに明治以後の農具類を中心とした四〇〇点以上の民俗資料が収集されたのが、この大岡歴史民俗資料館のはじまりです。



暮らしの変化に直面し猛進した時代に、これらの資料を熱心に集め伝えた人々。その動機の内側には千年来保ち続けてきた古い暮らしを断つことへの無意識の恐れもあっただろうか。博物学は近代化へ躊躇する人々を納得させ、なぐさめる気持ちの入れ物として近代化社会へ貢献してきたのかもしれない。

これらの資料は、中央公民館二階で一般公開されたあと、元青年学校の建物で展示保管されていましたが、安全な保管場所をつくるのが急務となり昭和五十四年度の事業として鉄骨コンクリート造り高床式の二階建、除湿・耐火構造の資料保管専用の建物が建設されました。当時は中学校・中央保育園・小学校の新・改築があいつぎ村財政も厳しいなか、総工費四六〇〇万円余うち七六〇万円は国と県の補助金で、あとは村の起債などがあてられました。

昭和五十五年四月一日開館。七月から一般公開を開始。開館を機に、再度村内の家々から歴史・民俗資料を受け入れ、昭和六十三年十一月現在の時点で、民俗資料三〇八点、歴史資料二二点、その他九五点、合計五〇〇点が保管されています。

平成に入り、テーマをもった陳列のため、研究協議会が設けられ、県内各地の資料館・博物館などを視察、平成七・八年度事業で二階部分の全面的に改装配置替えを行いました。入口正面に若ノ尻の神面装飾道祖神のレプリカをすえ、信仰・暮らし・人生・産業・歴史・教育の順に展示されています。

生活や信仰を博物館に収蔵し、民俗資料館をこぞって開館した時代から四半世紀を過ぎ、いよいよ現在はこれらの生活文化が暮らしから消え去り伝承する人々もわずかなつてきました。一方で押し進めた近代化の暮らしが村の共同体の解体とも重なっており、共同体の存続と新たな豊かさとも集団関係づくりが問われています。

地方自治体の多くが合併し経費削減の見直しを実施するなかで、各地の民俗資料館は閉鎖が相次いでいるのが現状です。単に史資料を収蔵し閲覧するだけでなく、古い暮らしから学び担うとは何だったのか、その意味を根底から振り返る時期にきています。